

四川省見聞録

近藤幸次

はじめに

今回の四川省調査は、福井大学に留学しておられた周先生が今年の 6 月に福井へ来られて会食した時に、四川省の九寨溝がたいへん美しいところであり杭州経由で見に行こうということから企画され、REFの海外研修として行われることになった。参加を募ったところ加藤先生をはじめ池田氏、脇本氏、近藤のメンバーが参加することになった。予定は九寨溝を中心に計画されていたが、九寨溝を中心とする地域で大きな地震が発生し九寨溝へは行けなくなったため、急きょ四川省の省都成都およびその近辺の世界遺産を中心とする視察に切り替え行った。加藤先生が数年前に成都の都市調査を行いある程度の情報を持っておられたことと、今回の調査は日程的に余裕があったため、四川省の最新のインフラや世界遺産となった観光地のハード、ソフトを含めた施設整備や利用状況をつぶさに調査することができたので以下に見聞録として報告する。

中部国際空港から上海空港へ

今年 2 回目の上海浦東空港の利用であったが、何度来ても上海浦東空港の規模の大きさに驚かされる。どこまでも続く空港敷地、数えきれないくらいの世界各国や国内線の機体が駐機場に翼を休めており、これだけ大規模な空港を管理する能力のすごさに感心するばかりだ。このクラスの空港は中東のドーハで見たが、世界のハブ空港になるためにはこれくらいの規模が必要なのか？この後、成都へ行くために杭州空港や成都空港を利用することになるが、これらの空港も内陸の空港にもかかわらず、多数の国際線、国内線が離発着する近代的な空港となっており、空港の規模も成田や羽田に優るとも劣らぬように見うけられ、20 年程前に初めて中国を訪問した時に利用した上海の虹橋空港の雑踏を知っている者にとって、急速に経済発展してきた中国のパワーに、ただただ驚かされるだけだった。

上海から杭州へ

上海空港から杭州へは、高速道路を利用して約 3 時間の移動であった。高速道路も建設されて約 20 年、急速に車社会に突入している中国、高級乗用車やトラックで混雑していた。

途中のサービスエリアもコンビニや飲食店が賑わっていた。また、今回一部で ETC のゲートが整備されていた。成都でも地方へ高速道路が整備され、それを利用したが、地方部ではまだ ETC ゲートは見られな

かった。ネット社会の中国、今後急速に普及するものと思われる。今回も 5 年前と同じ西湖湖畔の西湖大華ホテルに宿泊したので西湖の夜景や日中の景観を堪能することができた。さすが中国有数の景勝地であり多くの人で賑わっていたが、景観保全や環境の美化については前回来た時よりもより配慮されていた。また、ホテル近辺の商店街や飲食店街も再開発されシャレタ環境となっていた。



写真-1 西湖畔夜の散策(2017. 9. 17)



写真-2 西湖クルージングの船上で(2017. 9. 18)

杭州から成都へ

杭州空港から四川省の省都成都までは飛行機で約 3 時間のフライトで、中部国際空港から上海空港までとほぼ同じ時間を要した。成都は人口 1200 万人の大都市で地下鉄の整備が進められ、都市高速における BRT や自動車のナンバープレートによる規制が行われていたが、朝夕の通勤時間帯はすごいラッシュであった。これまで中国も臨海部を中心に訪れていたが、そこでは漢民族の人がほとんどであったが、成都の空港へ降り立ったとたん、空港やホテル、街中でチベット族などの少数民族の人々を見かけることが多くなり、中国の奥地に来たことを認識させられた。また、さっそく

四川料理店を訪れ麻婆豆腐などの四川料理を味わったが、山椒の実からくるあまりの辛さに閉口させられた。

都江堰から青城山へ

成都に到着した翌日、都江堰と青城山を訪ねた。都江堰と青城山は2000年にユネスコの世界遺産に登録された地区で両地区とも多くの観光客で賑わっていた。

まず、都江堰であるが、成都の北西48km、揚子江の支流岷江上流にある古代水利施設で紀元前3世紀に秦国の太守李冰の指揮で始まり、紀元前256年から紀元前251年にかけて原形が築造されたものである。現地を訪れると立派な近代的な水利施設となっているが、説明によると当時、中州は木製の三又と竹かごに石を詰めた蛇かごを積んで造られたと書いてあったが、大河である岷江での工事であるだけに難工事であったことが偲ばれた。しかし、ここから引かれた岷江の水は成都平原を潤し、成都を豊かな大地に変え今日の繁栄につながっている。



写真-3 青城山門にて(2017.9.19)

午前中に都江堰を訪れた後、午後から道教の聖地である青城山を訪れた。ここは後漢の末期、道教の前身と言われている宗教集団五斗米道の創始者張陵が布教を始め、その後も道教の聖山として栄え、現在も山中に道観が点在し多くの道士が修行をしている。我々は

ふもとの駐車場から電気自動車に乗り換え約10分弱で青城山山門に着き、そこから徒歩とロープウェイで青城山一峰である前山標高1,260mの山頂近くにある上清宮を目指した。山門から30分ほど歩いたところにロープウェイ乗り場があり、そこから約10分乗った後さらに30分程階段を登ると上清宮に到着した。我々のような初老の観光客には少しハードなコースであった。そのため要所々々には有料の輿があつて足の弱い人達に利用されていた。都江堰でも同じであったが、さすが世界遺産に登録されるだけあつて、環境に配慮したゴミひとつ落ちていないきれいな観光地であった。

樂山大仏から峨眉山へ

青城山を登った翌日、樂山大仏を訪れた。ここも峨眉山と合わせて1996年に世界遺産に登録されている。この大仏は、大仏の目の前を流れる岷江の氾濫を鎮めるために岩壁に彫られた世界最大の石刻座仏で、完成までに90年を要し803年に完成した。我々は巨大な大仏の全体像を見るために、樂山港から観光船に乗り、岷江の川の方から眺めたが巨大なものであった。陸上からも高低差のある岩壁を多くの観光客が訪れ賑わっていた。また、これら観光地の道路も、中央分離帯や歩道に花壇や街路樹がきれいに植栽されゴミひとつ落ちていなかった。この日は樂山市内の街路や公園を簡単に視察した後、翌日の峨眉山登山に備えて峨眉市内のホテルに早目に到着した。このホテルの前も4車線どうしが交差する交差点であったがラウンドアバウトで処理されていた。ホテルの上から観察していると交差自体は照明されてきれいであったが、交通の処理状況は、複数車線があるなかで自転車や人が自由に横断するという日本人の感覚ではとても考えられない状態だった。



写真-4 樂山大仏と遊覧船(2017.9.20)

いよいよ中国仏教の四大聖地の一つである峨眉山へ登る日が来た。ホテルからマイクロバスで峨眉山バスセンターの駐車場へ到着すると専用の登山バスに乗り換え、標高約 500mの場所から標高約 2,500mの雷洞坪駐車場まで約 2 時間かけて登っていった。駐車場へ着くとさらにロープウェイに乗るためにそこから 30 分程山道を歩かなければならないが、山道に入ったとたん我々に被害はなかったものの野生猿の歓迎に驚かされた。ロープウェイは 10 分足らずで約 3,050mの終点に到達しそこからは、階段を 20 分ほど歩くと山頂の金キラ金の華蔵寺、金頂に到達したが多くの参拝客や観光客で賑わっていた。3,000mを超える高さということで日本にいる時から防寒対策をいろいろ心配していたが、天気もよかったせいか厚手の上着があれば十分だった。また、この高さだと日本ならとくに森林限界を超えているはずなのに、亜熱帯であるせいか樹林帯であった。また、山頂付近ではタワークレーンを使って建物が建設されていたが、そこへの建設資材の運搬は道路がないということで、労働者の背中に砂やセメントが担がれ運搬されていて昔の苦力が連想された。



写真-5 峨眉山金頂にて(2017. 9. 21)



写真-6 パンダ繁殖研究基地にて(2017. 2. 22)

パンダ繁殖研究基地から武侯祠、錦里古街道へ

日本へ帰る前日は成都近郊の施設を見学した。最初にパンダ繁殖研究基地を訪れたが、この施設は、成都の郊外の広大な敷地に四川省の山奥の野生のパンダが生息しているのと同じような環境を再現し、約 170 頭のパンダを飼育し繁殖をおこなっているとのことであった。我々も施設内の園路を回りパンダを観察したが、日本と違ってゆっくりといろんなパンダの生態をみる事ができた。

次に、武侯祠博物館を見学した。ここは三国志で有名な蜀の丞相諸葛亮とその主君であった劉備とが祀られている。また、隣接して錦里古街道という古い商店街が再現され多くの観光客で賑わっていた。

おわりに

昨年からの旅を含めて 3 度中国を訪れる機会があった。昨年、大連を訪れた時は郊外に多くの高層ビルが林立していたが、不動産バブルがはじけたということで夜になっても電気がつかない高層ビルや、建設途中で放棄された高層ビルであふれていた。成都でも建設中の高層ビルは見られたが、建設が放棄されたビルは見られなかった。臨海部と内陸部で経済発展の進み具合が異なるのか？それとも地方政府の政策の違いか？また、5 年前に訪れた時と昨年から今年にかけて訪れたいずれの地域でも大きく違うのは、街が非常にきれいになってゴミひとつ落ちていないということであった。そのために掃除する人々が頻繁に見うけられた。中国の国策として進められているようだ。今回も杭州を訪れたが、これで 3 回目の訪問となったが、行く时必须、福井大学へ留学していた陳さん、李さん、周さん達が迎えてくれる。彼らもいまでは重要なポストにつきたいへん忙しいことと思うありがたいことだ。



写真-7 李偉国氏・陳怡平氏との再会(2017. 9. 17)